

No.7 株式会社中川 (1/2)



森林資源と地域経済の循環を生み出すことを目指し、 育林業に特化した、「木を伐らない」次世代の林業のあり方を提案

■ 基本情報

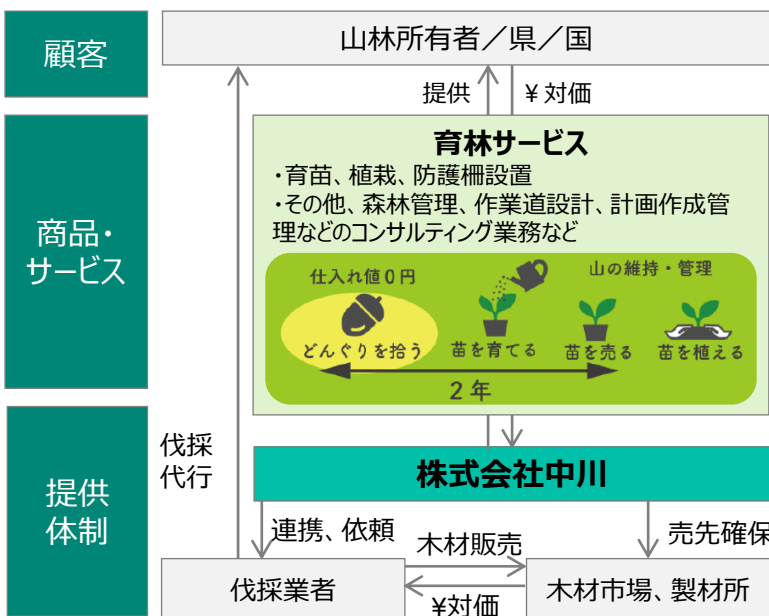
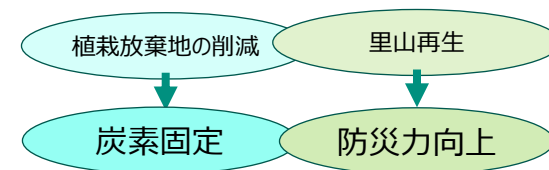
企業名	株式会社中川
本社所在地	和歌山県田辺市
設立年	2016年
従業員数	26名 (2022年3月時点)

■ 背景・課題

地域課題 ・ 企業課題	<p>植栽・耕作放棄地の解消、森林資源の循環</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 植栽が進んでおらず若い林齢の木が少ないなど、人工林の少子高齢化が進んでいた。 <p>林業従事者の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 高齢樹の伐採は素人には危険が伴い、人材育成に時間を要した。
地域資源	<p>ウバメガシの木</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 郷土樹種である広葉樹ウバメガシからどんぐりが取れるものの、ゴミとして捨てられていた。
地域への貢献	<p>雇用拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 育林事業であれば高齢者・若手など、幅広い人を対象に雇用に繋げることができる。 <p>野生動物との共生</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 広葉樹の植林により、野生動物の住み処確保とそれに伴う農作物の獣害低減に繋がる。

■ 事業概要

- 株式会社中川（以下、(株)中川）は、「木を伐らない林業」をコンセプトに、伐採された山への植林を主とした育林業を行う林業ベンチャーである。空き地を利用した苗木の自家生産や獣害対策、コンサルティング業務、教育事業など、林業を盛り上げる様々な企画・事業を展開している。
- 地域の中小企業や住民とともに田辺市の森を再生するプロジェクト「熊野の森再生事業」では、郷土樹種であるウバメガシのどんぐりを取り、協賛企業が空き地などで苗木を育て、その苗木を(株)中川が買い取ることで企業の負担を軽減しながら山に植栽を行い、持続可能な森づくりを進め、2020年度グッドデザイン賞を受賞している。
- また、苗畑で使う電力は、自然エネルギー100%に切替えた。さらに、今までのイメージにとらわれない林業を目指し、日当制、高賃金、勤務時間の自由化など、新たな働き方を展開し、10名以上のIターン者の雇用につなげている。林業の働き方改革でも「グッドデザイン賞」を受賞し、日本健康会議「健康経営優良法人2021 中小規模法人部門」にも認定されている。
- 他産業とのコラボレーションにも積極的に取り組む。地元のデザイナー・木工職人らとの連携では、虫による食害を受けた紀州材「あかね材」を活用したものづくりを行う「BokuMoku（ボクモク）」を推進。さらに、(株)YAMAPとの連携では、登山で得られるポイントで山林保全を支援できる取り組み「DOMO（ドーム）」も行っている。



どんぐりによる林業課題の解決



出所) 株式会社中川資料・インタビューより

No.7 株式会社中川 (2/2)

■ 事業立上・推進期における取り組み内容

立上期

- ・ (株)中川の創業者である中川氏は、地元田辺市へUターンし、森林組合で勤務していた。持続可能な働き方ができていないという問題意識を持ちながら、林業のことを調べると、林業が課題だらけであることに気づいた。伐採面積に対する植林面積が約4割という状況は、逆に捉えれば「残りの6割はビジネスチャンス」だと考え、起業を決意した。
- ・ このような課題は、区長や山主など、昔から里山を良く知る人たちに話を聞くことで知った。針葉樹の植樹で広葉樹が減少し、どんぐりが減少していた。それをエサとする野生動物が山から下りて、農作物に獣害をもたらすことを聞き、どんぐりを育てて広葉樹を植え、動物の住む場所を確保しながら森林資源が循環する形を作りたいと考えた。
- ・ 林業は、30年遅れていると言われている。であれば、30年前に他産業で起こった変革を、林業で行えば良いという発想のもと、製造業における「工場の分業化」を参考に、林業も伐採と植栽を分業すれば、業務の効率化やプロフェッショナルの早期育成につながるかと考え、植栽に特化した「育林業」を構想した。

推進期

- ・ 森林組合を辞めた人同士のつながりで経験者を巻き込み、植栽の現場をこなした。一方で、「無理をすれば続かない」「先を見据えた林業の働き方改革が必要」と考え、日当制・フレックスタイム制等様々な社内制度を見直した。インターン生に「大変」だと指摘された業務は、無理して頑張るのではなく改善、例えば、急峻な現場での荷物運搬作業向けに、ドローンを自社開発した。労働災害の防止だけでなく、災害時の物資運搬の協定を田辺市と締結するなど、地域の防災にもつなげることができた。
- ・ このように、無理をしない「自然のあり方」に基づいた、顧客・従業員・全ての人の幸福度向上や、食べ物も住処もあり動物と共生する森づくりを目指している。
- ・ その他、地域課題をビジネスで解決する人材育成と事業創出を目指した「たなべ未来創造塾」で地域内の異業種人材とつながり、コラボレーションが生まれている。木材の活用方法を広げ、人を集め、さらに林業界を盛り上げていきたいと考えている。

■ 取り組みにおける工夫

ポイント 「経済的価値」ではなく「環境的価値」を訴求

山林保有者は、当初は経済的なリターンを求めて投資をしている。今では経済的なリターンではなく、植栽をすることで防災や獣害対策に繋がるなど、地域貢献への関わりしるがある点を訴求することによって、山林保有者の価値観を転換し、理解を得ている。

ポイント 社員間で成果を見える化

社員の給料は、各班の班長が2カ月に1回査定する。また、社員は皆お互いの給料を見ることができる仕組み。上司の給料が分かれば、新人にとって将来の自分が目指す姿や所得まで含めたキャリアプランが想像しやすい。いわば、全員で全員を管理している。

ポイント オープン／シェアマインドで業界を盛り上げ

開発したドローンは、特許は取らない。業界／他業界にとって良い事はオープンにしてノウハウを共有すれば、市場が拡大する。目先の売上は下がるかもしれないが、市場が広がれば林業+αの領域におけるイノベーションにつながっていくと考える。

■ 目指す将来像

「人」が集まる循環で、林業界を盛り上げる

- ・ 「面白そう」と思うと、人が勝手に集まってくる。人が集まって面白そうに仕事をしていると、それを見てまた人が集まるという循環が生まれる。そうやって仲間づくりを進め、林業界を盛り上げていきたいと考えている。
- ・ 同時に、音楽、登山、教育など、「林業×○○」という他産業とのコラボレーションを進め、バイオマス発電以外の木材の活用方法を模索していきたい。

林業の働き方改革



- ・ 学歴を気にしない
- ・ 自主性と責任
- ・ 結果を出さないとけない

